

〔書評〕

添田建治郎著

『2番教室からの日本語講座
—方言・地名・語源のなぞ—』

二階堂 整

前著『愉快な日本語講座』（小学館 2005・7）に続く、講義の中での著者と学生のやり取りから生まれた著作である。講義で「質問カード」を配布し、学生に「疑問や意見」を書いてもらう。次週、それについて「説明」する。すると、再質問があったり、別の考えの提案があったりする。それに対してまた応える。講義での双方向のやりとりから、この本は生まれている。言わば、学生と一緒に作り上げてきた著書ともいえそうである。

目次を示せば、次の通り。項目だけ見ても、「あれ、そういえば」と気づかせられるものがあるが、各章では、その話題から始まり、様々な日本語の問題が取り上げられている。

- 1 前書に寄せられた意見から
- 2 祭りだワッショイ
- 3 「ボン太とポコ」で白熱
- 4 根掘り葉掘り？
- 5 代表選手は「ぼち」と「たま」
- 6 「半島」は半分の島？
- 7 「防人」はなぜ「さきもり」なの？
- 8 「一～十」「十～一」の数え方
- 9 ほほろをふる
- 10 私もよしてえ～
- 11 雪に変わりはないじゃない
- 12 添田様へ
- 13 「おひめさん」と「オトノサン」
- 14 どちらですか、「～山」と「～岳」
- 15 光秀の頭は「きんかあたま」だったか？
- 16 「～町」「～村」、何と読む？
- 17 大田さんと太田さん
- 18 あなたの言葉、私のことば
- 19 日本語に心が見える
- 20 日本語もいろいろ

著者は「はしがき」の中で「綿密な論証は二の次にした思い付き程度の代物なのだが、その

分内容がやや硬くなって、寝ころんでは読めない『日本語講座』になったかもしれない」と述べるが、むしろ寝ころんで読んでいても、はたと気づかされる記述があり、起きださずにはいられない書籍になっているのではないかと思う。

具体的に第10章「私もよしてえ～」を見ていこう。ここでは、仲間に入れてもらう時の「かけ声」の地域差が話題になる。ある学生が私の言い方と違うとの発言がきっかけで、「私はこういう」と多くの回答が集まり、話題になっていったのではと思う。以下、内容を要約して、説明する。

「ヨセテ」は近畿、中・四国で盛んに使用される言い方で、一段活用「寄せる」であり、古く万葉集に用例がみられる。同じ表現で「カテテ」があり、九州の中部・北部と東北・北海道に分布し、二段活用動詞「かつ」に由来する。奈良時代に用例があり、日本の両端に分布することから、最も古いものと推定される。分布が広く、古いと思われるものに「イレテ」があり、源氏などに用例がみられる。「マゼテ」は東日本に分布がやや多めで、中世あたりから用例が見られる。九州・東北には「カタッテ」「カタセテ」が分布する。「語る（語らせる）」に由来し、源氏に用例が見られる。「ハメテ」は四国や東北の一部に分布し、「嵌める」につながり、近世に用例がある。さらに、「ヨセテ、カテテ、マゼテ／寄せ鍋、かて飯、混ぜ飯」とみな一緒（所）に寄せ集める表現と指摘する。

このように、各地に違いがあることを示すに終わらずに、古い日本語に由来すること、「寄せ鍋」など、現代の言葉にも、通じるものが残っていることを指摘して、単なる「珍しい」だけに終わらせず、学問的に深化させている。ところが、ここで「マゼテ」が問題として急浮上する。先の記述の如く、もともとこの語は東日本中心である。しかし、学生は中・四国、九州出身が多いにもかかわらず、「ヨセテもカテテもカタシテも言わない、普通にマゼテを使っていた」との回答がたくさん返ってきたのである。この謎は、ある学生によって解決される。「マゼテ」は「クレヨンしんちゃん」が犯人。彼は「マゼテ」と言うのです。」との回答がよせられる。篠崎1998を見ても、老年層では、「マゼテ」は東日本中心の分布だが、すでに大学生では西日本に勢力を拡大しつつある様子が見てとれる。「クレヨンしんちゃん」は1990年に漫画アクションで連載開始、1992年にはテレビ朝日がアニメ化している。時期は重なりそうである。こうしてまさに双方向のやり取りから、問題が発展し、解決していく過程がよくわかる記述になっていて、楽しんで読むことができる。

「むすびにかえて」の箇所、「先生が「質問する側ばかりに回らないで！」と学生に注文する意味がわかりました。質問に対する答えを見つける「方法」を学ぶのが大学の勉強なのですね」との学生の回答があげられているが、実際、先の記述にあるよう、学生もそれに応えて、「こうではないか」・「こう考えてみたが」と回答をよせており、学生といっしょにつくりあげてきたことがよくわかる。

専門の純粋な研究書とは異なるため、ここでは著書の魅力を伝え、興味を示す、本を手にとってみることにつながればと、努めたつもりである。著者の日本語に対する情熱をいささかなりとも伝えることができたなら、幸いである。

参考文献

篠崎晃一 1996 「気づかない方言と新しい地域差」大西・篠崎・小林編『方言の現在』明治書院

(2011年7月15日 ひつじ書房刊 四六判 239頁 2100円(税込) ISBN 978-4-89476-557-3)
(にかいどう・ひとし)